

虚実の章



「……」
「で、どうしてこうなるのかしらね」

「私たちも
ニンゲンを見つけて
あんな進化をして
みたくなったんだよ」

「なったの！」
「すごかったねー！」
「ズバーってきて
ドーンって！」

「パートナーがいれば
私にもできるのだろう？」

「…できると思うけど。
だいぶ思い切りがいいわね」

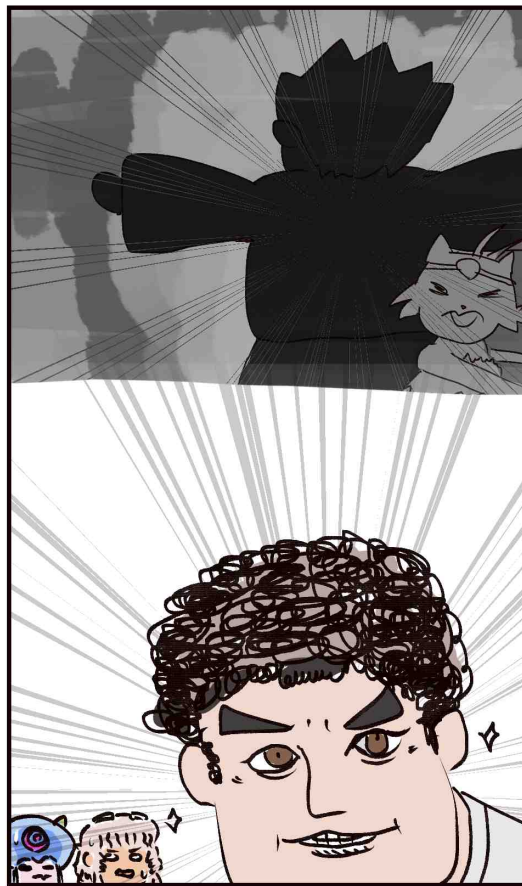


「ススムもグラウモンの
アレ当たってソレで済むの
どうなってるのよ」

「アレではない、
エキゾーストフレイム
だ」

「んー、まあオレは
頑丈が取り柄
だからな！」

「ええー…
そういうレベルの
話かなあ…」



「その…カッとなって
しまってすまなかつた」

「二度とちんちくりん
呼ばわりしないでよね」

コレ「デジタルワールドは
野蛮だから嫌！とか煽つといて
逆ギレしてるジェリーモンも
かなり悪いと思うよ？」

「ええっと…悪いのは
『パフェは渡さない！』
とか言って最初に暴れた
チュパモンイッってことで…
オレのアタマに免じて
みんな水に流してくれ」



「…というわけでだお兄さん、
私のパートナーに
なってくれやしないか」

「えっ？
あ、ボク！？
うれしいなあ～。」

…さっきは驚いて
逃げちゃったけど、
グラウモンって
あのグラウモン
だよな？」

「あの…？」



「むかしやってたアニメの…
デジモン…なんだったか
忘れちゃったけれど、
それに出てたんだ、
グライモン」

「えっ…そんなのあったの？」

「あたしも知らないよ？」

ジェリーモンも
サラキアも
その話は初耳の様子だ。

「アニメのグライモンは
違う色だった気がするけど…
本物は黄色
だったんだな～。

これからよろしくね、
グライモン」

「ありがとう、
よろしく頼む」

「ススムもあれくらい
積極性もちなさいよ」

「お前なー
少しは反省しろっての」

「そもそもキアが
こんなところで
出したがったから
悪いのよ」

「だよねー
ごめーん」

ススムには少々
ついていけない
展開もあったが、
ようやくなんとか話が
まとまってきたようだ。

「いいなー、ボクたちも
パートナーほしいー」

「ところでなんだっけあの…
アレ…そうだ、

デジヴァイスは
貰えたりとかするのかな？」

「デジ…バイス…??」

いや、気のせいだった。
まだまだ問題があったようだ。



「えっと…アニメだと
進化させるときに
使ってて…」

「お母さんがくれた
なんか^そ脚につけて^れるやつ
じゃない？」

「あ、コレかー
じゃあこっちはママに
聞かなきゃね」

「ちっちゃい子たちは…
お兄さん流石に
全員は無理だよな」

「さっきまでこういう
デジモンの支援団体を
探してたんだけどね…」

「あーそういえば…
けど手掛かりなかったし」

「まあ、それと…
その人たち、ちょっと
怪しい感じするのよね」

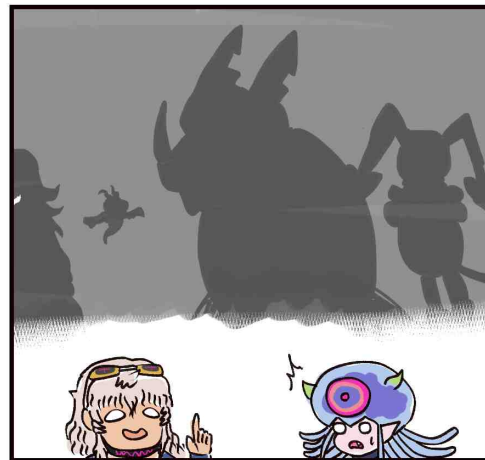
「そうなの？」

「んー……じゃあ、
とりあえずウチに
来てもらおっか」

「えっ…!？」

「ウチに3人はいるし
ママなら **ちょっと増えても**
へーきかなって」

「ああ…なんだ…」



「ってことはみんなで
あたしたちの家に
来てもらえば
オッケーだねー」

「い、家に！？」

「あ…ススムは
時間ない感じ？」

「い、いや…
すまん、なんでもない
大丈夫、うん」

「ボクは一応バイト中だし
終わってからなら…」

「え、じゃあ終わるまで
ここ延長お願いしてー…
あと、さっきのパフェ4つ
お願いしていいですかー？」

「かしこまりましたー」

「あのお兄さんが
すんなり受け入れてくれて
助かったわ」

「ほんとにねー。
さて、話してばっかだったし
ここらで一曲いれちゃおう」

「おっ…キアがどんな曲
聞いているのか
気になってきたぞ」

「あたしのシュミより
まずはコレでしょー。
『FACTION』！
午前の3時じゃないけど！」

「おお、いいねー。
コレがなかったら、
オレたち全員だれも
出会ってなかったもんな！」



网网 7 2 尸 网 网 网 网 网 网 网...